

高学年分科会

授業者 藤村 捺央 八尾市立永畑小学校
発表者 奥野 麻由美 箕面市立西小学校
司会者 押谷 大輝 箕面市立西小学校
記録者 橋本 尚実 箕面市立西小学校
助言者 小松 久芳 河内長野市立天野小学校 元校長

1. 授業者より

「心の形」

校内で男女の性別について人権の研修を行った。その際に校内でのスリッパの色が議題になり、色に対して思っていることが違うと感じ、色について考えたくなった。

子どもたちが心の形を表すのに様々な材料を用意したが、選ぶ際「色砂を使うことが楽しいから使用する」ではなく、なぜそれを使用して表現したいのかを考えさせることに重点を置いて授業を行ってきた。そのように素材や色に対して考えられるように、1時間しっかりと鑑賞の時間を設けた。

思い通りの表現ができるように何度でもやり直していいことや、子どもたちが手に取りやすいように材料を教室の中央に置くことなどを工夫したことで、子どもたちは楽しんで自分の「心の形」を表現していた。



2. 質疑応答

質問 「心」という見えない部分を具体化することは難しい。今回は平面にしていたが、立体にして奥行きを持たすことにこだわってもいいのではないか。

答え 立体にこだわってしまって、色・素材に注目しなくなってしまうのではないかと考えた。今回は色・素材に着目させるためにあえて平面で取り組んだ。

質問 最後はどのような形で展示を行うのか。

答え 半立体の作品もあるので、机に置いて誰もが見られる形で展示を行う。

3. 指導助言

心の中を形にすることは難しいが、色・形・素材を活かし、子どもたちの個性がうまく出せていた。そのために今まで行ってきた授業の流れが模造紙にまとめられて貼ってあり、子どもたち自身で振り返ることができていたのが良かった。また、子どもたちが自由に材料を取れるように教室の真ん中に置く工夫もなされていたこともよかった。

「15分ね」と見通しを持たせて活動を始めることで、集中して取り組むことができていた。最後には自分の心を言葉でしっかりと班に伝えることができており、今回の学習は「主体的」「対話的」「深い学び」のすべてを満たしている授業であった。思春期に入る高学年の子どもには心を表すという事に抵抗のある子も多い。葛藤しながら自分の心を表現してきた途中の過程もポートフォリオを作成して自分の足跡を残すことで大事にしていると感じた。これから「紙粘土を使って立体にする」「レリーフにする」など広げていくことも可能。

学習を通して自分の心の内をさらけ出せるということは、図工の良さである。単元の最後に自分はいいいことも隠したいことも含め、色や形を使い表現できたのかふり返ってほしい。

4. 実践報告

「造形遊びで育まれる子どもの表現にどう寄りそい、認めるか」

造形遊びに取り組むことに対して、何をどのようにすればいいのか？子どもたちに何をさせたいのか？よく分からず、また、場所・時間設定・評価などの不安も多く手を伸ばせずにいた。「造形遊び」の指導を受けていく中で、「進んで楽しむ意識をもたせながら、資質・能力を育成しよう。子どもがつくる過程そのものを楽しむ中で「つくり、つくりかえる、つくる」学びの経験をさせよう。」と意識をして授業を組み立てることにした。

「実践例①」【4年生 つなぐんぐん】

わりばしなどを輪ゴムや紐をつかって思い思いにつなげていく教材。子どもたちにとっても、初めての造形遊び。自由につくるということに戸惑いながら、なかなか進まない児童もいた。けれども、自分の作品を他の人の作品も合わせてもよい、そこからさらに発展させてもよい、一人で取り組んでもよいという自由さにだんだんと交流が始まっていった。また、そ



れでも手が止まっている児童には適切に声をかけることで、決まった物を作るのではなく、自分たちのひらめき、思い付きを形にしているのだと気づき、発想を広げ楽しんでいた。

「実践例②」【5年生 あんなどころがこんなところに見えてきた】

日頃から見慣れている場所やものに働きかけ、対象物の特徴を生かしながら楽しく見えるものを作っていく教材。まずは、「空間をみたてる」ためにグループで話し合い、視点を変えて身の回りの場所をじっくりと探す時間を設けた。壁紙がはがれ色が変わった部分を雨雲に見立て、雨が降る街並みを表現したグループや、ドアの小窓も電車の窓に見立て、車窓からの風景を表現したグループなどがおり、どのグループも視点を変えて身の回りの場所や環境をより良いものに変えていった。鑑賞の時間には作品を見て回ることができなかつたため、各グループごとに写真を撮影しての鑑賞を行った。写真にすることで見てほしい瞬間や角度にこだわり見てもらうことができた。最初はなかなか見立てることが出来ず、場所の決まらないグループもあったが、どこか一つ見立てることが出来ると、どんどんと構想を広げ協力してつくる姿が見られた。



「実践例③」【6年生 ここからみると】

材料や場所の特徴から、空間の奥行きや特定の場所から見ると何かの形に見えるような工夫をし、見る人が楽しくなるものをつくる教材。鏡の特徴を活かして鏡と向の壁に作品を貼り付けたグループや、空間の奥行きを利用した作品を作成したグループなどがあつた。奥行きを活かしているため、見る角度や高さが重要になってくるので、見てほしい場所を自分たちで指定していた。

【活動を行ってきて】

子どもたちの中には、造形遊びに取り組む中で毎回ぶつかる壁がある。それは、自分の発想をもとにつくっていくのに一歩が踏み出せない、自信が持てないことである。そのために気を付けていることは、できるだけ皆が同じスタートをきれるように導入でイメージをしっかりと待たせる時間を確保すること、一斉に取り組めるように準備時間をとることである。また、手の止まっている児童には個々に声をかけ、一緒に考えることも必要である。そのときや、作品を見てまわる際にも必ず肯定的な発言を多く持つようにしている。応援するような声をかけると次へ繋がる質問をしていくことがある。つくるものが決まったら子どもたちは、発想や構想を広げ時間を惜しみながら作品づくりに取り組み、想像もつかないような世界を生み出してくれる。

自由な発想で「つくり、つくりかえる、つくる」は当たり前にはできないものではない。学年ごとの特徴があり、学年を追うごとに活動が広がっていくため、「自由な表現」(資質・能力)を育むためには、低

学年からの積み重ねが大切だと感じた。また、資質・能力の積み上げは他の作品作りにも波及していくのではないかと感じている。今後は子どもたちの発想や構想をより引き出せるように、また子どもたちを見とるということにも視点をおき、授業をつくっていきたい。

5. 感想

図工に対する姿勢が子どもたちに伝わっている。場の設定の工夫が生きている。イメージ・発想が難しい児童が多いので参考にさせていただきたい。

6. 指導助言

非常に質の高い、子どもらしさが表れている力作が多い。「こういう子どもたちに育てたい」という思いが伝わってくる良い授業である。今回の事例では、子どもたちが学校を見渡して「素敵やな」と思えるスクールデザインにつながる作品。光・空間を考えて、子どもたち自身が今持っている技法、知恵をつかって取り組んでいることが素晴らしい。

造形遊びは1年生からの積み重ねが発揮される活動である。普段使う素材だけでなく、自然や廃材など普段見逃しがちな、組み合わせをしたら面白いと思う素材はたくさん周りに眠っている。それを先生が見つけて集めるということは重要なポイントである。

これからの時代、子どもたちが社会に出る時は AI 社会となっていくであろう。図工・美術こそ AI に奪われてはいけないと思う。よりクリエイティブに、人間的な力を発揮してほしい。豊かな社会を発揮するためにも、このような造形遊びの取り組みを各校でも取り組んでほしい。